

新作「いまはむかし～父・ジャワ・幻のフィルム」の上映が始まった。

「コロナ禍」のこんな大変な時期に、なんで公開するんだ...という声の中で善戦した。お客さんが来ないことには、けっこう自信があるんだと、いつもエバッてるんだけど、三週間の封切りの最後の頃は珍しく、ほぼ満員だった。ありがたい。

映画が一人ひとりに届いたかどうかが重要だ、という意味では、手応え充分だった。毎日のように劇場に通い、上映後に扉から出てくる方々の反応を見ているとよくわかる...「しっかり映画を観た」という、いい表情をしていたもの。

上映後のトークで、三十年余り製作に時間がかかってしまった一番の理由は、「戦争」という大きなテーマをしっかりと捕まえて映画にする自信が無かったから...と話したら、ゲストに呼んでいた友人が「自信が無いからいいんだ...私はこの映画、好き。自信たっぷりな人や映画は、信用できない」と、助け舟を出してくれた。

好反応だった「いまはむかし」の感想の中には、厳しい批判もまじっていた。“父、伊勢長之助が体験した「戦争」を追うのはいい、けれどもあまりに私的なことに寄りかかり過ぎている。私的なことを普遍化する眼差しが足りないようなものは、作品とは呼べない”...と。

「他人事」になりがちなテーマを「自分事」に、という思いで創ったのですが、舌足らずで作品に至っていないということか...? けっこうキツイことを言ってくれる。

観た方々の反応で多かったのは、それぞれの父や祖父、肉親の戦争体験を語ったものだった。

「実は私の父も...」という語り出しで書かれた感想は、どれも読み応えがあった。

『いまはむかし』と出会うことで、一人ひとりの記憶が引き出されたとしたら、

「他人事」ではなく「自分事」として映画を観てもらえたのなら、父の物語として「戦争」のことを映画にした甲斐があった...

嬉しかったのは、日本に居るインドネシアの方や、インドネシアに滞在したことのある日本の方々の反応だった。

“何と言っても、風、光、音が良かった。インドネシアの空気を感じた...

行きたい! 帰りたい!! と、

むしように思った”と綴られていた。

映画だからなあ、空気が伝わらなきゃなあ。空気が写っていて、空気に感応しなげりゃ、映画の存在価値が無いもの。

「なんか...よかったなあ」でいいじゃない、まずは。

テーマやメッセージについては、ゆっくり考えるさ...

とにかく観てほしい。

ワカラナイなりに、映画を創ることしか出来ないやつが、「自分」なりに一生懸命創った映画なんだ。親父のことを「映画創りに、しがみつくように生きて死んだ」とナレーションで言ったけど、かく言う私も、映画創りに「しがみつくように」生きて来たんだ。

お客さんの目に触れながら、映画が育っていく旅に、出来るかぎり付き合おうと思っている。

時々、長い長い一本の映画を創り続けているように思うことがある。一本一本の作品は、長い長い旅の停車場だ。

カラオケの数少ない持ち歌のひとつ、永ちゃんの『長い旅』を、ふと口ずさむ...

♪サイドバイサイド ハート トゥ ハート  
死ぬまでの長い旅だぜ...♪